クラスのマドンナを雌豚調教するまで（2）

作　黒見メイ

青春淫奏曲

青春淫奏曲　クラスのマドンナを雌豚調教するまで　2

作　黒見メイ

前書き

・この物語はフィクションです
・盗撮、盗聴、同意のない性行為は犯罪です
・女性を軽視する発言がありますが、現実では女性を大事に扱いましょう
・童貞を見下す描写がありますが、童貞には優しくしましょう

目次

第３章　恥辱の撮影会
第４章　化学の３P教室
第４・５章　日野の居残り授業

第3章　恥辱の撮影会

ユリは二度の性行為を大山と経験した。一度目は部室。二度目は誰もいないトイレの中で。既に膣の痛みは消え、あっさりと大山のペニスを受け入れるようになっていた。

まだ二回しか行っていない性行為。それでもユリは確かな快楽を感じていた。大嫌いな相手とのセックス。本当は逃げ出して拒絶したいはずなのに、ユリの中で大山のペニスを求める気持ちが生まれていた。

そんなものは気の迷いだと思いたかったが、あの快感はセックスでないと得られない。自分の価値観が壊れ始めている事実にユリは畏怖し、そんな自分を恥じた。

これが慣れというものなのだろうか。

自室で身体を伸ばし、ベットに寝転んだ。
休日の今日とて大山の命令が送られてきている。今回に関しては動画ほど難しい内容ではなく、指定された写真を何枚か撮れという命令だった。
際どいオーダーもあるが、正直に言えば普段のフェラチオ、セックスに比べれば数倍ましなオーダーである。それにどういうわけか、顔は写さなくていいとのことだった。
こういう考え自体、今の状態に慣れて麻痺してしまっている証拠なのだろう。
部室での処女喪失を思い出し、ユリは大きな溜息を吐いた。
後輩のタオルを汚し、先輩の下着を嗅いだ。そんな自分の下品な行動に興奮し、膣は濡れてしまった。そして想像していた以上の快感を与えられてしまった大山との性行為……。自分は本当に大山の言うような変態なのだろうか……。

違う、違う……。私は……。
「海斗……//」
気づけばユリは自分の股間を弄り、女性器を触っていた。既にユリの脳は自分で思っている以上に快楽に支配されていた。
「ああんっ// 気持ちい、気持ちいぃ//」
ユリの股間は直ぐに膣から水分を放出し、快感を得るための準備を整える。
ジュクッ、ジュクッ……。
以前よりも早く膣が濡れ、感度が高まっていることが分かってしまう。前は海斗とエッチをする妄想をしながら自慰行為にふけていたが、今は海斗に見られる想像をしながら自慰行為に及んでいる。自分の羞恥心を刺激することで更なる快感に繋がると、ユリは身を持って知ってしまったのだ。
「はぁ…はぁ…んんっ//」
そうだ……。写真撮らなきゃ。

ユリは自慰行為で興奮状態になり、気づけば淫らな写真を撮影することへの抵抗心が薄れていた。寧ろ自分の恥ずかしい写真を撮り、更にオナニーの感度を上げようという、深層心理まで生まれている。

命令されているから仕方なく。それがユリの免罪符だった。

先ず求められたのは谷間の写真。ブラジャーを使って胸を寄せ、大きな谷間を作ると、それを上から撮影した。

次に脇の写真。

まだ高校生のユリは美容脱毛などの施術はできていないので、自身で毛の処理をしている。脇の処理も完全ではないことを自覚しているので、ただでさえ恥ずかしい脇の近影に、羞恥心が増す。

それでもユリはどうにか脇を上げ撮影した。恥ずかしさと同時に、膣が濡れる感覚。これも全て大山と恥ずべき行為をしてきた代償だ。

続きは本編で——